

Title	<書評> キース・アンセル・パーソン『ジェルミナル・ライフ・ドゥルーズの差異と反復』
Author(s)	橘, 真一
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 229-234
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12570">https://doi.org/10.18910/12570</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

◇書評◇

キース・アンセル・パースン  
『ジェルミナル・ライフ——ドゥルーズの差異と反復』

Keith Ansell Pearson  
"Germinal Life : The Difference and Repetition of Deleuze"

1999 , Routledge

橋 真一

哲学とは、人間の条件を超えていこうとする努力でなくてはならない。

アンリ・ベルクソン「形而上学入門」①

著者キース・アンセル・パースンは英国ウォーリック大学哲学科教授。一九、二〇世紀ヨーロッパ哲学に対するフリードリッヒ・ニーチェとベルクソンの貢献を専攻とする。ベルクソン研究においては、今や英国における先導者であり、ウォーリックの研究プロジェクト「ベルクソニズム」など数々のプロジェクトを進行させている。ほか、ベルクソンの主要テキストの新編にも取り組んでおり、近年英国で出版されている英訳新編はパースンの仕事によるものである。その他主要な著作としては、この著書の姉妹編と位置づけられる"Virroid Life : Perspectives on Nietzsche and the Transhuman Condition" (1997 , Routledge) や "Philosophy and the Adventure of the Virtual : Bergson and the Time of Life" (2001 , Routledge) などがある。人間の条件と超人の概念についての理解を含む、生命の哲学の研究課題を適切な方法で発展させることに、自身の研究目標を定めている。適切な方法というのは、彼の支持する自然主義の在り様に関わる。それは、人間を自然に還し、自然に思考を再統合しながらも、本性の差異を認識し、人間の自由を妥当に説明できるようなものであるのだという。

この本の目的は、生命の哲学という蔑ろにされてきた近代哲学の伝統のなかにドゥルーズ哲学を位置づけることによって、その特徴

を照らし出すことにあるという。やはり不当に見過ごされてきた、生命の哲学者たるベルクソンの哲学再興に重大な分岐点となった、ドゥルーズによるベルクソンの読解こそ、ジェルミナル・ライフの哲学としてのドゥルーズ自身による思考の展開にとっても決定的な役目を果たしている。しかも、その影響は初期の著作から晩期の著作まで一貫して継続しているのだというのが、パースンの着想点である。

したがって先ずこの本は、ドゥルーズに終始通底するベルクソニズムを検証しようと試みる枠組みを設定する。構成は、全三章と結論部によってなっている。第一章はドゥルーズ初期の著作『差異について』も取り上げながら、『ベルクソンの哲学』を検証する。第二章は主著『差異と反復』の、内在的に創意に富んで複雑であるが、蔑ろにされてきた生命の哲学的側面に注目する。第三章では後期におけるフェリックス・ガタリとの共著『千のプラトー』の本質的な生命の哲学の次元へと移行する。最後に、結論部においては、ドゥルーズにおける「襲」の問題への回帰を一瞥する。

さて、この本の題名としての『ジェルミナル・ライフ』とは、無理矢理和語に訳そうとするなら、「生殖的生命」などといったことになるだろう。もっとも、すぐれてベルクソン研究者たる著者は、ベルクソンの「哲学的直観」における「胚の生命 (la vie embryonnaire)」という言葉を一捻りして題名に採用したのである。ここにその箇所を引いておく。

ちょうど胚の生命に加えられた衝撃が最初の細胞分化をうながし、分化した細胞はさらに分化を重ねてついに完全な有機体ができるように、思考作用の特徴的な運動は、思考が自身をますます分化させつつ精神の面の上をだんだんにひろがってゆき、ついに言語の面にまで及ぶようにするのです。<sup>(1)</sup>

この本の中では、予めの格別明確な定義は提示せずに、ドゥルーズ哲学を形容する際の鍵として、著者はこの語を導入する。言うまでもなく、ジェルミナルという言葉が、エミール・ゾラの著名な小説の題名を含蓄していることは間違いないであろう。ゾラの小説は、炭鉱という、いわば産業社会の生殖部でありながら、その内実たるや苛烈で過酷極まりない閉塞した闇を描き出した。ゾラの小説も、社会の生殖から、過重な労働生活における唯一的な享樂が結果する個体の生殖、窮乏の反動として徐々に胎動してゆく思想の生殖へと物語が展開していく。

当の生殖という主題にあって、著者がとりわけドゥルーズ哲学への寄与を強調するのは、アウグスト・ヴァイスマンである。ヴァイスマンこそは、ゾラ、トマス・ハーディ、D・H・ロレンス、ジークムント・フロイト、ベルクソンのような人々を含む作家や思想家の世代全体に挑戦を突き付けた人物だからである。すなわち、ドゥルーズにおける生命の哲学の展開も、ヴァイスマン的伝統とともにあるというのである。

生殖の途中でのみ遺伝子に変化が偶然的かつランダムに生じると

いう、「ヴァイスマンの生殖質の生物学は、種についての生命の哲学であり、個体についてはな」（GL p6）<sup>(7)</sup>。

周知の通り、トマス・マルサスは『人口論』で、「人口は無限に増加する傾向があり、それに歯止めをかけられるのは食料不足と疫病と戦争だけだ」と、説いた。これをもとにして、アルフレッド・ウォレスやチャールズ・ダーウィンは、「生き残っていきける数より多い個体が生まれ、その結果、生存のための闘争が頻繁に繰り返される<sup>(8)</sup>」なかで有利な形の変異が存続していくという、自然選択の原理を理解した。ところがヴァイスマンではさらに進んで、いわば「細胞内のマルサスの世界内の滋養のために<sup>(9)</sup>」、生殖細胞とともに細胞レヴェルでの闘争が繰り広げられているというわけである。著者はここから、生殖細胞系が個体発生 of 枢要を差し押さえることによって、種が個体の生を貶める事態を憂慮する。そこで、ヴァイスマンの生殖質に潜むニヒリズムと、フロイトの死の欲動というよく知られたニヒリズムの二様態を超越することがジュルミナル・ライフについての研究の目標になる。

著者は、フロイトの死の欲動もヴァイスマンへの応答の一貫として派生してきたという見方をとっている。ここにおいて、著者は『快樂原則の彼岸』を援用する。フロイトは、生きているなかで死に向かい行く欲動と、生命の永続的な更新へ向かい行く欲動を峻別することによって、ヴァイスマンへの「ダイナミックな系」を提供できるだろうと考えていた。「生命の持続と有機体の死去」というヴァイスマンの処遇は精神分析にとって大きな関心となっていた。

このことにパーソンは着目したわけである（GL pp109-110）。そうした生殖細胞質の閉じられたシステム観に対して、ジェルミナル・ライフを開かれたシステムのモデルとして捉え直すために著者が引き合いに出すのはドゥルーズとガタリの器官なき身体（以下CSO）である（GL p189）。ここでは、有機体の生成という倫理的問題が定立される。著者も細切れに引いているが、ドゥルーズ＝ガタリから引用する。

CSOは卵である。卵はしかし退行を示すものではない。それどころか、卵はまさに現在であり、人はいつも卵を、自分の実験の場として、結合された環境としてかかえている。卵は純粋な強度の場であり、内包的空間であって、外延的延長ではない。生産の原理としての強度ゼロである。<sup>(10)</sup>

「CSOは強度の生殖細胞<sup>(11)</sup>」であり、「常に同時的な、創造的包含<sup>(12)</sup>〔creative inclusion〕<sup>(13)</sup>」であり、「CSOの内側でこそ、器官は有機体と呼ばれる構成関係に入るのだ」<sup>(14)</sup>。そして、「閉塞すること、閉塞されることもなお一種の強度とはいえないか。それぞれの場合において、流通するもの、流通しないもの、流通させるもの、流通させないものを規定することだ。…（中略）…CSOの繁殖」<sup>(15)</sup>。

このように、初期から晩期まで、人間の条件を「超えて」複雑で逆説的な思考作業を為す、ドゥルーズの研究の焦点は、ベルクソンの概念のなかでも創造的進化であると著者は考える。そのなかでも

特に注意を払いたいと述べているのが、「ベルクソン主義者の記憶」の意味という、『千のプラトール』におけるベルクソニズムの相関位置である。ドゥルーズはここにおいて創造的進化に生成という用語で接近している。さらに言えば、創造的包含というこの語への展開に結び付けられた生成という用語がここにおいて登場してくる (GL p169)。C&O に一つの象徴をみるようにジェルミナル・ライフは、始点ではなく創造的生成の様態のみを参照するのである (GL pp190-191)。

ここで今ひとつ銘記しておきたいのが、ドゥルーズがベルクソンを取り上げる際に、『ベルクソンの哲学』(1966) から『千のプラトール』(1980) まで、多様体という同じ問題を巡りつつづけていることである (GL p155)。多様体とは生成の言い換えであり、統一なき中心であり、含みこむ次元の数によって単純に定義されるものである (GL p157)。

そうであるから『千のプラトール』では、動物学と進化論への機械的接近が為されている。ここで動物学においては、行動ではなくアジャンスマン「仏語 *agencement* を原語とし、「配列」「組合せ」「しつらえ」など多義的意味を有する」に焦点が当てられる。ここにおいて、現代進化論と現代動物学とがあいまみえることになる。ドゥルーズを大局的に近代哲学の言説のなかに位置づけることの困難さは、生物学と動物学のうちに哲学的思考を傾注しているという、こうした特異な性格に起因している。

それでも、生成は常に機械的自然発生とリゾーム的アジャンスマ

ンに含みこまれていく (GL p191)。こうして結論部では、言うなればこれまでの議論を畳み込むようなかたちで『髪』をもちだしてくる。ここでは以下に引用する『フーコー』の著名な一節に集約されるかように、議論は収束していく (GL p221)。

人間における力と関係する当の力は、どんなものなのか。それはもはや無限への上昇ではなく、有限性でもなく、〈無制限の有限〉であって、有限数の構成要素が、事実上無制限な組み合わせの多様体を与えるような力の状況を出現させることである。操作的なメカニズムを構成するのは、髪でも、広げられた髪でもなく、何か〈超髪〉とでもいべきもので、遺伝子コードの鎖に固有の褶曲や第三種の機械における硅素の潜在性や、言語が「もはやたえまなくそれ自身に回帰しながら、折れ曲がっていくしかなくなる」ときの現代文学における文の相貌は、そのことをあからさまに示している。<sup>(3)</sup>

以上で、内容についての紹介を一先ず終える。この本は大変豊かな内容をもった本で、同じ本に対して字数等の制約も同じであれば、幾通りか別様の紹介文が書かれることだろう。ただし、この本が達成していることについての意見についてはある程度一致が見られるはずである。さしあたり、多様で複雑とすらいえるドゥルーズの著作群を初期から晩期まで、ただか二五〇ページほどの一巻に纏め上げたその集約力には驚嘆の念を禁じえない。一見散漫に映る多彩

な記述も、数多の文献を正確に参照していることでその実、濃密な記述となっている。

反対に、この本が達成できなかったことを挙げるとすれば、章立て等の設定した枠組みからして、当初できると期待された論証がなされたとは言い切れないことである。つまり、ドゥルーズへのベルクソンの影響が他のどの哲学者にもまして決定的なものであるという点については、必ずしもまだ確信はされないであろう。

その点は『ベルクソンの哲学』、『差異の反復』、『千のプラトール』、『巽』など、扱った著作があまりに膨大で、ドゥルーズ自身に引張られ過ぎてしまった感がある。初志からすれば、たとえ刺激に乏しくなっても、ベルクソンとの対照を最後まで貫徹すべきであったともいえるし、その流れで、未だベルクソン読解に残存する難題にも取り組むべきだったといえるかもしれない。だが、このことは今後の研究者の共通課題といえよう。

実のところ、それ自身が創造的に進化していこうとするような哲学のなかで、たしかにドゥルーズが第一に参照しているのはベルクソンであると言いつつ切ることには困難が伴うように映る。

しかし、『記号と事件』のなかでドゥルーズは、哲学史の本を書くことから始めた自身の仕事は「スピノザニイチェの重大な統一をめざしていた」のであると説明するが、続けて「哲学史は、ある特定の哲学者が述べたことをもう一度述べるのではなく、哲学者には必ず言外にほめかしているものがあるが、それは何か、哲学者本人は述べていないけれども彼の語ったことのなかにあらわれて

いるものは何なのか、ということ語るべきなのです<sup>(ii)</sup>」と、述べている。ならば後世の哲学史はこの文面における「哲学者」の位置に「ドゥルーズ」を代入できるだろう。

すなわち、たしかに自身の哲学への影響者として、直接に名指している数は相対的に少ない。しかし、ドゥルーズがその全著作においてベルクソンに受けた影響は少なくないと言えよう。それは厳然たるベルクソニスムなのか、「スピノジスム的なベルクソニスム<sup>(iii)</sup>」なのか、それともそこにニイチェの恒常的な影があるのか、このことにはまだしばらく、決着がもたらされそうにはない。

#### 注

(i) ベルクソン『哲学的直観ほか』(2002)中公クラシックス、坂田徳男ほか訳) p58 をもとに Henri Bergson "Euvres" (1970, PUF) p1425 を参照し、訳を一部改めた。

(ii) 『哲学的直観ほか』p98 "Euvres" p1358

(iii) ターウィーン『種の起源』(1997)東京書籍、吉岡昂子訳) p21

(iv) GL p6 における David J. Depew and Bruce H. Weber "Darwinism Evolving : Systems Dynamics and the Genealogy of Natural Selection" (1996, MIT Press) p191 の引用。

(v) ドゥルーズニガタリ『千のプラトール』(1994)河出書房新社、宇野邦一ほか訳) p188

(vi) ibid.

(vii) GL p190 から改訳。また、仏語原典 Gilles Deleuze et Felix Guattari "Mille Plateaux" (1980, Éditions de Minuit) p203 に une involution creative.

- (viii) 『千のプラトール』 p183
- (ix) *ibid.* p176
- (x) ドゥルーズ『フーコー』(1987、河出書房新社、宇野邦一訳) pp211-212
- (xi) ドゥルーズ『記号と事件』(1992、河出書房新社、宮林寛訳) p227
- (xii) エリック・アリエズ「ドゥルーズのベルクソニスムについて」『批評空間』(1997、第II期第15号) p159